

中讃第二支部 車座元気会「総括」

平成23年7月25日
株式会社エモーション
代表取締役 香川湧慈

「人生は、応用力」

同友会活動を真剣にやっていると、仕事・人生を真剣に取り組んでいる経営者や後継者に出逢う。

その出逢いの中で、自分の仕事・人生を振り返るキッカケになることがある。

だが、振り返るだけではもう一つ意味を成さない。

他人の生き方・考え方を一旦受け入れて、自分の心の中で自分の仕事の組み方や「人生を歩む」心構えに照らしてみることが大切である。

* 人生は、過ごすものでも、送るものでもなく、「歩む」ものです。

応用力を身に付けるには、自分の中に「核」を持っていないと、中々身に付かないと思う。

それは、他人がちょっと上手く行っていたら、鵜呑みにして、自分が「振り回される」「ブレる」恐れがあるからである。

「核」とは、自分がどんな生き方をしたいのか、どういう人生を歩むことが、充実する人生だと言えるのか、という己が納得出来る考え方を持つことを言う。この「人生哲学」つまり、「人間はどうあるべきか」に明確な考えを持つことを言います。この哲学を確り持って、それを自問自答し続けて行く中で、次第に心の芯の部分に「核」が出来て来るのである。

その為に、自己成長するという自分の心構えと行動が「核」を作るのに、絶対必要なのである。つまり、自己成長につながるなあと感じた事に、即動くこと。自己成長につながると気付いたら、スグする習慣が実は、自分の運気を上げて行く。

もう一つ「応用力」を身に付けるには、素直な心に戻ることに。

素直な心とは、例え反対意見でも、自分の心を開いて受け止める器量が、己の心に冷静さを呼び起こし、己の器を深く、大きくして行くキッカケになるのだと思う。

応用力が無いと、せつかくの時間もお金も労力も「過ごす」ことになってしまい、人生を「歩む」ことに中々ならない。

他人の体験を自分に置き換えてみる想像力。

そして、真似をするか反面教師にするか、考える。

真似をするにも、必ず自分の体質に合うかどうかを工夫して真似て行くことが大切。

また、目標と出来る人物が居れば、リアルでも歴史上でもいいから、その人がどういう考えで、人生を歩んでいるのかを知り、そこに自らが直面している姿を合わせ、自分には何が足りないのかを考える。

その人物の智慧に委ねてみる。歴史の叡智に我が身を委ねてみるのである。

他人の生き方に学ばない者は、器を深く、大きくすることは出来ない。

応用力を身に付けるコツは、先ず、自分のコンディションを常に良くしていかないといけない。

そうしないと、物理的に脳が受け付けないように身体は、なっているのである。

まさに、「体調管理も仕事のうち」である。

自分の体調（コンディション）を常に大切に出来ない、怠る人は、人生でしっぺ返しが来ると思う。

せつかくの努力が報われないように、自分で実践しているようなものである。コンディションが常に良ければ、脳はピピピッと応用力を働かせてくれるものです。

自分の体験は一人の体験に如かず、他人の体験を我が体験とする応用力が、人生を幅広いものにするのだ。

他人の考えや体験を批判するのは良い。だが、「批判するなら対案を出せ。」である。

この自分ならどうするんだ！ということを考える行為を繰り返して行く内に、応用力が徐々に身に付いて来るものである。

TVを観てて政治家を批評するのは良いが、自分が総理大臣なら、自分が〇〇大臣なら、こうする！という対案を考えてみる習慣を持つこと。対案を考えたら、文章にしてみることに。

同友会での体験報告を受けても同じ。報告者の考えと行動の中から自分の目的に対して不足に思うものがあれば、自分流にパクレ（応用）ば良いのである。

先にも述べたが、自分の目的意識がハッキリしていなければ、パクリ用も無いのである。

やはり会社は、社員一人一人の特性（長所）を生かして、利益に貢献する努力をする所である。

この時大事なのが、理念の下「心を一つに合わす」こと。

皆が会社の目指す理念（何の為に経営するのか。ということ）を自覚して、一人一人の特性（長所）を誠心誠意発揮することなのである。

「一つを自覚して、一人一人の特性を生かす」

ここに“充実”が生まれるのである。

この「一つを自覚する」という意味をもう少し掘り下げると、どういうことかと言うと、まず会社の在るべき姿を理解することから始まるのである。

私の考える会社の在るべき姿とは、

「社長の経営に対する考えに共感し、理解納得して、各々の特性を生かして、人間として成長する努力をしながら、経済活動をする組織である。」

だから、社員としての責任の第一は、社長の考えを理解納得する努力が求められるのである。当然、その前提には、社長の考えが社長自身の我欲でなく

「人の道」が根底に無ければ社員の賛同など得れるはずはありません。

そのような考えの下、「あらゆる事象」から、自分の目的に役立つことを応用して行く姿勢が大切であると思います。

「あらゆる事象」とは、何からでも得ようと意識すれば、全てが参考書になるんだということです。